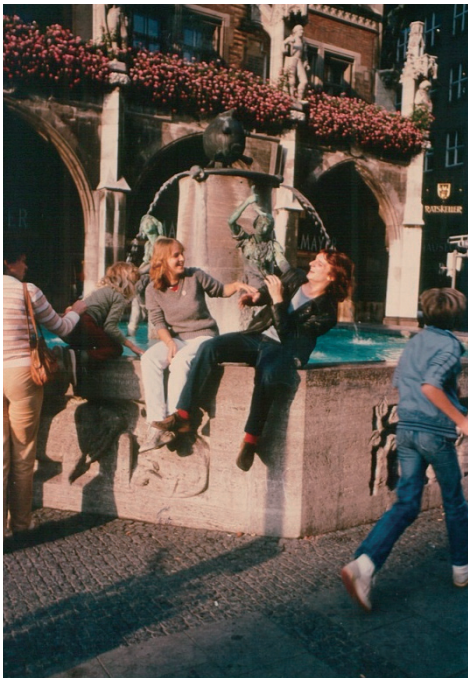
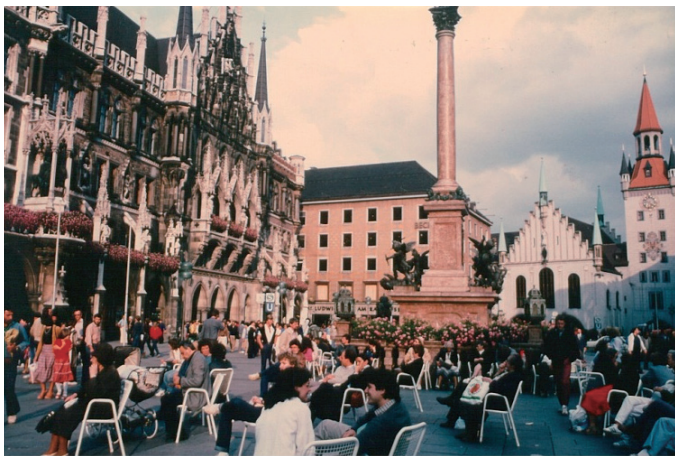
15 まちの情景と建築　世界編　　田中修一

[庁舎広場] 花の広場　ベルギー・ブリュッセル グランプラス広場

ベルギーの首都ブリュッセル市役所である。広場の周りはシックな石造りのファサードを持ったチョコレートのゴディバなどブランド物を扱う店舗が取り囲む。広場にはいつも物売りが店を広げている。だからこの広場はいつでも観光客や市民でにぎわうのだ。この広場から出発する店舗の通りは、美しいガラスの屋根で覆われた女王のアーケードと称する道につながっている。雨の日でも安心といった工夫は、ヨーロッパでも時折見かける光景である。

この石畳の広場は通常は何の変哲もないのだが、2年に一度1週間だけ絨毯模様に一変する。様々なベゴニアの鉢を市民が持ち寄り広場一面に敷き詰めるからだ。その光景を一目見ようとヨーロッパ中から観光客が押し寄せる。市庁舎のバルコニーは人で埋め尽くされる。世界で最も美しい広場だとヴィクトル・ユゴーが絶賛した折り紙つきだ。どうしてそうすることになったのか。ここは古来から交通の要衝だった。そのため強国は争ってこの地を抑えようとする。その影響でベルギーが独立したのはまだ 200 年にも満たない。ドイツ・フランス・オランダなどの民族が混在して住む。従って言語・風俗・宗教・伝統文化などどれもまちまちなのだ。ではどうやって国を意識させるか。世界一美しい広場を造って国民の誇りにしようと考えたのだ。日本でも長野の善光寺参道で、チューリップの花びらで花回廊を造った例がある。

くつろぎの広場　ドイツ・ミュンヘン市役所広場

ドイツのバイエルン州の州都ミュンヘン市役所前はアフターファイブから市民でにぎわう。夏のヨーロッパは夜がなかなか暮れないので、広場はカフェに様変わりだ。中央の噴水池に腰を下ろし、塔時計の人形を見上げる。日本人の感覚ではとてもお堅い市役所の広場の光景とは思えない。けれども市役所をシティーホールと言うのは、行政庁舎ではなく、市民のホールなのだとの意識の表れである。ここに限らずヨーロッパの市役所や教会堂の広場は「マヨール」「マルクト」などと呼ぶ。いずれも広場の意味だが、公共のものだとのニュアンスが強く表れている。イタリアのカンポ広場では年に一回村対抗の競馬をするし、ドイツ・ブレーメン市役所のマルクト広場には、グリム童話の「ブレーメンの音楽隊」ロバ・イヌ・ネコ・ニワトリが陣取って子供たちを待っている。定時が過ぎると鎖や扉で閉じて立入禁止にしまう日本の行政庁は、一等地の活用方法を大いに見習うべきだろう。